

肢体不自由者の移動の困難性に対する 肢体不自由者と大学生の意識の差異

聖心女子大学大学院 小川 奈々
聖心女子大学 植田 誠 治

I. 問題の所在と目的

現在では、駅のエレベーターの設置等により障害者に対する障壁は取り除かれつつある。それにより、障害者は外出しやすくなっていると考えられる。しかしながら、外出の際にも、周囲からの目が気になる、他の人と一緒にいると常に「障害者と介助者」という目を向けられるといった障害者に対する、障害のない人の意識における問題がある（稲垣，2007）。すべての人が暮らしやすい環境を整えるためにはこのような意識の問題点を取り除く必要がある。

障害者に対する意識や態度に関する研究の中で生川（1998）は障害者や関係者の考える好意的な意識や態度の検討が必要だとしている。また、水野（2008）は、道徳教材の「車いすの少年」を使用し車いす使用者と大学生に対する意識を調べることにより、車いす使用者と学生の間で危険に対する意識にずれがあることを指摘している。これに関連し、これまで障害者に対して行われた障害者の意識の研究からは、障害者の困難が明らかにされている（浅賀・黒沢・小室・泉，1995、高山・植村，1998、西館・水野・徳田，2006、稲垣，2007、富樫・水野・徳田，2007）。しかしながら、障害者に対して行われた研究で明らかにされた障害者の意識が、障害のない人に対して行われた障

害者に対する意識に関する研究に反映されているかどうかは定かではない。また、障害者と障害のない人の間における意識の違いに関する検討も十分に行われていない。

ところで、障害者の意識および、障害者に対する意識は障害の種類や程度により異なると考えられる。そのため、障害者の意識や障害者に対する意識に関する研究では障害の種類や程度を特定する必要がある。

以上のことから、障害者に対する障壁を取り除き、すべての人が暮らしやすい環境を整える手がかりは、障害の種類や程度を特定した上で、障害者の意識を明らかにすること、それを基に障害者と障害のない人の意識の違いを明らかにすること、様々な障害や事柄について研究を積み重ねることにより得られるのではないかと考えられる。そこで、本研究では、肢体不自由者と大学生の間における意識の違いを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者

(1) 肢体不自由者

脳血管疾患による中途障害者が通所する2施設に調査を依頼し38名の肢体不自由者の協力を得た（男性28名、女性10名）。平均年齢は、61.8歳（ $SD=5.8$ ）で

あった。なお、本研究における肢体不自由者は歩行困難者とした。そのため、歩行困難者に当たらない1名を除く、37名を分析対象とした。

(2) 大学生

国立 A 大学、教育学部の学生に調査を依頼し 42 名の協力を得た（男性 31 名、女性 11 名）。平均年齢は 21.1 歳 ($SD=2.7$) であった。なお、調査項目の半数以上を回答していない 1 名を除き、41 名を分析の対象者とした。

2. 調査手続き

(1) 肢体不自由者

2010 年 12 月に質問紙を用い、内容を調査者が書き取る方法で調査を行った。これは、調査協力者が筆記することが困難な場合を考慮したものである。調査時間は、1 人当たり約 15 分とした。

(2) 大学生

2010 年 12 月に質問紙による調査を実施した。調査時間は 15 分とした。

3. 調査内容

(1) 肢体不自由者

まず、性別、年齢、補助具および介助の必要性、外出の頻度についての回答を

求めた。

次に、困難に対する意識を明らかにするために、町の中における困難な箇所に関して可能な限り多くの自由回答を求めた。町の中の困難としては、人とすれ違う時にぶつかりそうになる（西館ら、2006）、点字ブロックがあると移動しにくいなど（富樫ら、2007）、これまでに明らかにされてきた肢体不自由者の困難を含むイラストを作成し（図 1）、その中で考えられる困難な箇所に関する回答を求めた。

さらに、周りの人の手助けに関する意識を明らかにするために、困難な状況において周りの人に望む行動に関する質問に対する回答を求めた。この時、坂の上の店に行こうとしている時（以下、坂道とする）、横断歩道を渡ろうとしている時（以下、横断歩道とする）の 2 場面を困難な状況として設定した。その上で、それらの状況において、1.すぐに助けてほしい、2.声をかけてほしい、3.見守ってほしい、4.放っておいてほしい、5.その他のうち当てはまるものに対し、単一選択による回答を求めた。

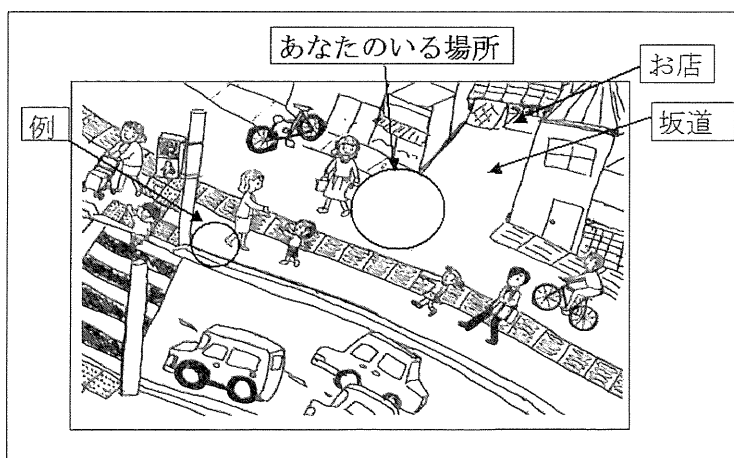


図 1. 調査用イラスト（肢体不自由者用）

(2) 大学生

まず、性別と年齢、障害者との接触経験および、障害に関する学習経験についての回答を求めた。

障害者との接触経験は、身近な障害者の有無とした。また、身近な障害者がいる場合には障害の種類を 1.視覚障害、2.聴覚障害、3.肢体不自由、4.知的障害、5.発達障害、6.精神障害、7.その他から、単一選択により回答を求めた。さらに、関係性についても 1.同居している家族、2.親戚、3.親しい友人、4.知人、5.その他から、単一選択により回答を求めた。

また、障害に関する学習経験では、学習経験の有無についての回答を求め、その内容を 1.障害者に対するボランティア、2.障害者から直接話を聞いた、3.障害や障害者に関して調べた、4.ブラインド体験、5.盲導犬体験、6.手話体験、7.車いす体験、8.点字体験、9.体に重りを付ける体験、10.その他の 10 項目からの複数選択により回答を求めた。さらに、内容の 1.障害者に対するボランティアおよび 2.障害者から直接話を聞いた、3.障害や障害者に関して

調べたとする項目を選択した場合は、学習した障害の種類を 1.視覚障害、2.聴覚障害、3.肢体不自由、4.知的障害、5.発達障害、6.精神障害、7.その他からの複数選択により回答を求めた。

次に、肢体不自由者の困難に対する意識を明らかにするために、町の中で肢体不自由者が困難に感じる箇所について、可能な限り多くの自由回答を求めた。この時、町の中の様子として肢体不自由者の調査票と同じものに「杖をつく人」を加えたイラストを提示し（図 2）、イラストの中の肢体不自由者が感じると思われる困難に関しての回答を求めた。このときの障害は、「身体の片側を動かすのに困難があり、特に、片方の手や足は動かすにくい。歩く時には、杖を使い、ゆっくりしか移動できないが、一人で外出する」という状態を設定した。

肢体不自由者に対する手助けの意識を明らかにするために、まず、自分が肢体不自由者だと仮定した時に困難な状況で周りの人に望む行動に関する回答を求めた。困難な状況には、肢体不自由者と同

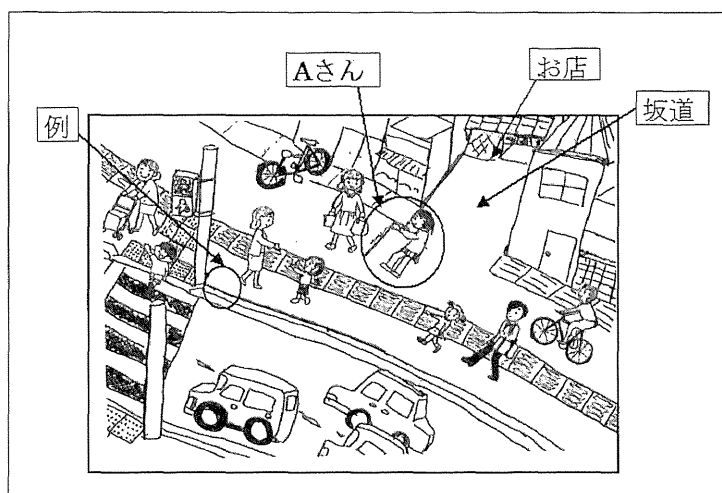


図 2. 調査用イラスト（大学生用）

表 1. 補助具使用の有無 人 (%)

使用	18 (48.6)
時々使用	1 (2.7)
不使用	18 (48.6)

表 2. 介助の必要性 人 (%)

いつも必要としている	1 (2.7)
必要なことが多い	8 (21.6)
それほど必要としない	7 (18.9)
まったく必要ではない	21 (56.8)

様に坂道、横断歩道の 2 場面を設定した。その上で、それらの状況において望む行動を、1.すぐに助けてほしい、2.声をかけてほしい、3.見守ってほしい、4.放っておいてほしい、5.その他からの単一選択により回答を求めた。また、肢体不自由者が困難な状況にあるときに自分がとる行動を 1.すぐに助ける、2.声をかける、3.見守る、4.何をしたらよいか分からない、5.何もしない、6.その他からの単一選択により回答を求めた。

4. データ分析の方法

2 群間の平均の差には t 検定を用い、クロス集計による検定には χ^2 検定を用いた。クロス表の 1 つのセルの数値が 5 以下となる場合には Fisher の直接法を用いた。また、有意水準は 5% とした。統計処理には SPSS 20.0 for Windows を用いた。

III. 結果

1. 調査対象者の実態

(1) 肢体不自由者

まず、補助具の使用については表 1 のようであり、使用していると回答した者、使用していないと回答した者がともに 18 名であり、時々使用すると回答したのは 1 名であった。なお、この時の補助具は杖とした。

介助の必要性については表 2 のように、まったく必要ではないと回答した者が 56.8% と最も多かった。これに対し、いつも必要としていると回答したのは 2.7%

であった。このように、介助は必要としない者が 50% を超え、いつも必要な者は少なかった。外出については、全員が週 4、5 日以上であった。

以上のように、杖使用者と不使用者はほとんど同数だったが、全ての対象者の外出頻度は高く、介助を常に必要とする者は少なかった。

(2) 大学生

障害者との接触経験や、障害に関する学習経験の有無については表 3 に示すとおりであった。まず、身近に障害者がいるのは、29.3% であり、70.7% は身近に障害者がいなかった。身近にいる障害者については、同居家族 3 名、親戚 4 名、知人 3 名、その他 2 名であった。また、障害の種類は、視覚障害 1 名、肢体不自由 2 名、知的障害 5 名、発達障害 2 名、その他 2 名であった。

障害に関する学習経験については、95.1% は経験があると回答し、経験がないと回答したのは 4.9% であった。学習経験の内容は、表 4 に示すとおりであり、上位は、障害者に対するボランティアと車いす体験の 53.7%、ブラインド体験の 51.2% であった。その他の項目についても、盲導犬体験、点字体験以外は回答した者が 10 名を超えた。このように、ボランティアとともに体験学習を経験している者が多かった。

以上のように身近に障害者がいない者が多かったが、90% 以上が障害に関する

表 3. 障害者との接触経験および障害に関する学習経験 人 (%)

	障害者が身近にいる	障害者が身近にいない	合計
学習経験あり	11 (26.8)	28 (68.3)	39 (95.1)
学習経験なし	1 (2.4)	1 (2.4)	2 (4.9)
合計	12 (29.3)	29 (70.7)	41 (100.0)

表 4. 障害に関する学習経験の内容 人 (%)

車いす体験	22 (53.7)
障害者に対するボランティア	22 (53.7)
ブラインド体験	21 (51.2)
障害者から直接話を聞いた	19 (46.3)
体に重りを付ける体験	13 (31.7)
手話体験	12 (29.3)
障害や障害者に関して調べた	11 (26.8)
点字体験	9 (22.0)
盲導犬体験	2 (4.9)
その他	14 (34.1)

学習経験を持ち、ボランティアを経験している者も 50%以上であった。

2. 肢体不自由者の困難に対する意識

困難の回答個数について、肢体不自由者は平均 1.5 個 ($SD=1.5$) であり、大学生は平均 4.5 個 ($SD=1.7$) であった。すなわち、大学生のほうが肢体不自由者より多くの困難を回答した ($t=8.1, p<.001$)。また、困難として挙げられたものをイラストと照らし合わせ、示してあるものを表 5 のように項目としてまとめた。

困難として挙げた内容は、肢体不自由者は 15 項目と無回答、大学生は 21 項目であり、無回答はなかった。後ろからの自転車、駐輪、自転車全般、子ども、横断歩道全般、車、交通量の多さ、点字ブロック、車道との境界、坂道全般、の 10 項目は、肢体不自由者と大学生で同じ項目が挙げられた。それに対し下り坂、

その他のうち荷物以外の 4 項目および無回答の合計 6 項目は肢体不自由者のみで回答があり、子ども以外の人に関する 5 項目、信号機、歩道全般、上り坂、店に関する 2 項目、荷物の合計 11 項目は大学生のみに回答があった。

肢体不自由者では無回答の 35.1%、横断歩道全般の 27.0%、後ろからの自転車の 24.3%が上位であった。これに対し大学生では後ろからの自転車が 65.9%、駐輪と横断歩道全般が 61.0%と上位を占めた。

また、後ろからの自転車、駐輪、子ども、横断歩道全般の 4 項目においては大学生のほうが肢体不自由者よりも有意に回答が多かった。これに対し肢体不自由者のほうが大学生よりも有意に回答が多い項目は認められなかった。

肢体不自由者のみにおいて回答された

表 5. 困難な場所

人 (%)

		肢体不自由者 (n=37)	大学生 (n=41)
自転車	後からの自転車 ^(※1)	9 (24.3)	<u>27 (65.9)</u>
	駐輪 ^(※2)	1 (2.7)	<u>25 (61.0)</u>
	全般	2 (5.4)	2 (4.9)
人	子ども ^(※2)	4 (10.8)	<u>20 (48.8)</u>
	前の人	0 (0.0)	6 (14.6)
	親子	0 (0.0)	3 (7.3)
	お母さん	0 (0.0)	1 (2.4)
	おばあさん	0 (0.0)	1 (2.4)
	人ごみ	0 (0.0)	1 (2.4)
横断歩道	全般 ^(※3)	10 (27.0)	<u>25 (61.0)</u>
	車	3 (8.1)	4 (9.8)
	交通量の多さ	1 (2.7)	2 (4.9)
	信号機	0 (0.0)	3 (7.3)
歩道	点字ブロック	3 (8.1)	10 (24.4)
	車道との境界	3 (8.1)	4 (9.8)
	全般	0 (0.0)	9 (22.0)
坂道	全般	9 (24.3)	18 (43.9)
	下り坂	5 (13.5)	0 (0.0)
	上り坂	0 (0.0)	12 (29.3)
店	店のドア	0 (0.0)	8 (19.5)
	全般	0 (0.0)	2 (4.9)
その他	患部側	2 (5.4)	0 (0.0)
	立ち話	2 (5.4)	0 (0.0)
	再び動く	1 (2.7)	0 (0.0)
	障害物	1 (2.7)	0 (0.0)
	荷物	0 (0.0)	1 (2.4)
無回答		13 (35.1)	0 (0.0)

下線は有意に多いことを示す

(※1の項目は $p < .001$, χ^2 検定、※2の項目は $p < .001$, Fisherの直接法、※3の項目は $p < .01$, χ^2 検定による)

項目のうち、下り坂および無回答の2項目では回答が10%以上となった。これに対し、大学生のみにおいて回答された項目のうち、前の人、歩道全般、上り坂、店、店のドアの5項目が10%を超えた。

すなわち、大学生のほうが肢体不自由者より多くの箇所を困難であると意識することが明らかとなった。また、肢体不自由者が困難と回答しないものも困難な箇所として意識していた。その一方で、

肢体不自由者が困難としても大学生が困難として回答していない箇所も認められた。このように、肢体不自由者と大学生の間の意識の違いが明らかになった。

3. 手助けに関する意識

まず、周りの人に望む行動に関して、坂道の場合の回答は表 6 のとおりであり、肢体不自由者と大学生の回答状況には有意差が認められた ($p < .05$, Fisher の直接法)。肢体不自由者は放っておいてほしいとする回答が 43.2% と最も多かった。それに対し、大学生では、見守ってほしいとする回答が 34.1% と最も多かったが、声をかけてほしいとする回答、放っておいてほしいとする回答も 20% を超えた。このように、肢体不自由者は放っておいてほしいとする意識が高いのに対し大学生は見守ってほしいとする意識があった。

また、横断歩道の場合の回答については表 7 のようになり、坂道の場合と同様に回答状況には有意な差が認められた ($p < .05$, Fisher の直接法)。肢体不自由者は放っておいてほしいとする回答が 45.9% と最も多かった。それに対し大学生では見守ってほしいとする回答が 39.0%

と最も多く、声をかけてほしいとする回答も 34.1% であった。このように、肢体不自由者は放っておいてほしいという意識があるのに対して、大学生は見守りを望むなど気にかけてほしいという意識が認められた。

すなわち、肢体不自由者は放っておいてほしいと望むのに対し、大学生のほうが肢体不自由者より見守りを望むことが明らかになった。特に横断歩道において、肢体不自由者と大学生の回答状況の差が顕著に認められた。

さらに、肢体不自由者が困難な状況にある時の、大学生の対応に関して、坂道では表 8 のように、見守るとする回答が 56.1%、声をかけるとする回答が 22.0% であった。それに対し、その他の項目は 10% に満たなかった。

また、横断歩道では表 9 のように、見守るとする回答が 34.1%、声をかけるとする回答、何をしたらよいか分からないとする回答がともに 22.0% だった。それに対し、すぐに助けるとする回答は 2.4%

すなわち、困難がある肢体不自由者に

表 6. 周りの人に望む行動 (坂道)

人 (%)

	すぐに 助けてほしい	声をかけて ほしい	見守って ほしい	放っておい てほしい	その他	
肢体不自由者 (n=37)	1 (2.7)	4 (10.8)	4 (10.8)	16 (43.2)	12 (32.4)	*
大学生 (n=41)	1 (2.4)	10 (24.4)	14 (34.1)	11 (26.8)	5 (12.2)	

*: $p < .05$, Fisher の直接法による

表 7. 周りの人に望む行動 (横断歩道)

人 (%)

	すぐに 助けてほしい	声をかけて ほしい	見守って ほしい	放っておい てほしい	その他	
肢体不自由者 (n=37)	1 (2.7)	4 (10.8)	2 (5.4)	17 (45.9)	13 (35.1)	*
大学生 (n=41)	1 (2.4)	14 (34.1)	16 (39.0)	5 (12.2)	5 (12.2)	

*: $p < .05$, Fisher の直接法による

表 8. 肢体不自由者に対する対応（坂道） 人（%）

すぐに助ける	0 (0.0)
声をかける	9 (22.0)
見守る	23 (56.1)
何をしたらよいかわからない	3 (7.3)
何もしない	3 (7.3)
その他	3 (7.3)

表 9. 肢体不自由者に対する対応（横断歩道） 人（%）

すぐに助ける	1 (2.4)
声をかける	9 (22.0)
見守る	14 (34.1)
何をしたらよいかわからない	9 (22.0)
何もしない	4 (9.8)
その他	4 (9.8)

対しては、すぐに助けることはしないものの、見守る、声をかけるなど肢体不自由者に対して注意を向け、必要な時には手助けできるようにしようとする大学生は考えていた。特に、坂道においてそのような意識が認められた。

以上のことから肢体不自由者は、困難な状況にあってもすぐに手助けされることを望まず、放っておいてほしいと望んでいるのに対し、大学生では自らが肢体不自由者だと仮定した場合には見守ってほしいと望んだ。また、肢体不自由者が困難な状況にある時には見守るとした。すなわち、大学生は、肢体不自由者を気にかける行動を意識することが明らかとなった。このように、肢体不自由者と大学生の間の意識の違いが認められた。

IV. 考察

本研究では、肢体不自由者と大学生の間における障害に対する意識の違いを明らかにすることを目的とした。その結果、大学生のほうが、町の中の困難な箇所を

多く意識していることが明らかになった。しかしながら、肢体不自由者と大学生の意識は一致したものではなかった。例えば、同じ坂道においても、上り坂は大学生のみで挙げられ、下り坂は肢体不自由者のみで挙げられた。また、周りの人に望む行動では、大学生のほうが肢体不自由者より見守りを望むことが明らかになった。さらに、肢体不自由者が困難な状況にいる場合の大学生の意識も、多くが見守るとし、肢体不自由者に対して注意を向け、必要な時には手助けできるようにする行動を意識することが認められた。

以上のように、町の困難に対する意識、手助けに関する意識のいずれにおいても大学生と肢体不自由者の間で意識の違いが明らかになった。これは、障害者と大学生では意識の違いがあるとする研究（水野, 2008）とも同様の結果であった。このことは、肢体不自由者と大学生双方の要因による結果ではないかと考えられる。

まず、肢体不自由者の要因には質問の

方法にあるのではないかと考えられる。肢体不自由者に対する質問は、自分自身のことを想定するものであり、普段の生活に密着していた。そのため、既に対処法があったのだと考えられる。また、調査協力者の要因もあるのではないかと考えられる。本研究における調査協力者は外出頻度が高く、町の中で困難を経験していると思われる。また、程度は軽度であり、動作は他の人よりも遅くなるものの、常に介助が必要ではない。そのため、困難が現われにくく、援助も必要ないとされたのではないかと考えられる。田垣（2006）は、軽度障害の場合には、困難を自分で挙げにくいとしている。今回の調査においても、同様のことがいえるのではないかと考えられる。すなわち、この2つの要因により肢体不自由者の困難が大学生より少なくなったのではないかと考えられる。しかしながら、障害者の意識はまだ十分に明らかにされていない。そのため、今後さらに、困難などに対する障害者の意識を明らかにしていく必要があると考えられる。

また、大学生の要因には知識が挙げられる。本研究では学習経験がある大学生が90%以上であり、障害者に対する知識が身につけていると考えられる。これまでの研究においては、障害者との接触経験や障害者に対する知識が意識や態度に影響するとされている（木船，1986、河内，1990、阿尾・鈴木・吉武・上埜，2000）。また、知識や接触経験により、障害者の困難をより認識することも明らかにされている（田川・本谷，2004）。

本研究においては、これまでの研究と同様、障害者に対する知識があるために困難をより認識したのでないかと考えられる。学習経験と意識の関連に関しては、今後、学習経験の少ない学生との比

較により明らかにしていくことが必要である。また、学習内容に関しての詳細な検討も今後必要となる。さらに、水野（2008）は、教育学部の学生と肢体不自由者の意識のずれを指摘している。本研究における調査協力者も教育学部の大学生であり、このことが肢体不自由者よりも困難を意識し、肢体不自由者に注意を向ける意識をもつ要因になったのではないかと考えられる。このことについては、河内（1990）も大学の専攻により、障害者に対する意識が異なることを指摘している。そのため、今後は他の学部との比較を行う等、さらなる研究により明らかにする必要がある。

この他にも、これまでの研究により、発達段階などが意識に影響することが明らかにされている（豊村・菊池，2007）。しかしながら、本研究においては、発達段階などの要因は明らかにされていない。今後は本研究における大学生の学習経験等の課題、本研究においては明らかにされていない要因を考慮し、さらに研究を積み重ねる必要がある。

文献

- 阿尾有朋・鈴木恵太・吉武清實・上埜高志（2000）一日ふれあい体験が中学生の障害児・者に対する態度に及ぼす影響，東北大学教育学部研究年報，48，207-220.
- 浅賀忠義・黒沢和隆・小室晴陽・泉清人（1995）肢体不自由者の外出行動を阻害する環境要因に関する調査研究，日本建築学会計画系論文集，474，83-90.
- 稲垣貴彦（2007）身体障害者の外出についての実態調査，中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要，8，127-134.
- 河内清彦（1990）肢体不自由者(児)に対す

- る大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について, 特殊教育学研究, 28(3), 25-35.
- 木船憲幸 (1986) 精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係, 特殊教育学研究, 24, 11-19.
- 水野智美 (2008) 道徳資料「車いすの少年」に対する車いす使用者と大学生の評価, 障害理解研究, 10, 1-6.
- 生川善雄 (1998) わが国における知的障害児(者)に対する態度研究の現状と課題, 特殊教育学研究, 35(4), 67-72.
- 西館有沙・水野智美・徳田克己 (2006) 肢体不自由者の交通バリアフリーのための教育のニーズに関する調査研究—交通バリアフリー教育と交通サバイバル教育について, 障害理解研究, 8, 1-10.
- 田垣正晋 (2006) 軽度障害というどっちつかずのつらさ, 田垣正晋編著『障害・病いと「ふつう」のはざま—軽度障害者どっちつかずのジレンマを語る—』, 明石書店, 51-71.
- 田川元康・本谷望 (2004) 障害児の統合教育に対する保育系女子大学生の意識, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 237-241.
- 高山佳子・植村潔 (1998) 肢体不自由者とその介助者からみた空間移動に関する諸問題, 横浜国立大学教育人間科学部紀要.I 教育科学, 1, 49-66.
- 富樫美奈子・水野智美・徳田克己 (2007) 車いす使用者の移動においてバリアとなっている点字ブロック, 障害理解研究, 9, 49-57.
- 豊村和真・菊池麻里 (2007) 視覚・聴覚障害学生に対するイメージの意味構造—中学生・高校生・大学生についての検討, 北星論集(社), 44, 1-14.

Difference of Consideration of Persons with Physical Disabilities and University Students regarding the Difficulties that Persons with Physical Disabilities face when Moving from One Place to Another.

This study explored the difference of consideration of persons with physical disabilities and university students regarding the difficulties that persons with physical disabilities face when moving from one place to another. An investigation was conducted by administering a questionnaire in December, 2010. Persons with physical disabilities and university students were the subjects. Out of a total of 38 persons with physical disabilities, 37 were considered suitable candidates. On the other hand, out of a total of 42 university students, 41 were considered suitable candidates.

The university students considered greater number of places in a town difficult to access compared to persons with physical disabilities. However, the consideration for difficulty of university students and persons with physical disabilities was not congruous. Moreover, it became clear that in a difficult situation, the university students tended to get more worried than persons with physical disabilities. Further, university students tended to worry about persons with physical disabilities who were in difficult situations. Thus, the difference of consideration of persons with physical disabilities and university students became clear.